佳作

希望～受け継がれた思い～

青森県十和田市立大深内中学校
一年　佐々木　京　佳

私に「ちから」をくれるものは、日本の伝統文化や職人文化です。

私は、小さい頃から日本の歴史が大好きでした。小学六年生から授業として歴史を学んでいくなかで、次第に興味を持ったのが日本の伝統文化でした。昔の日本人が生み出した伝統が現代にまで残っているのは素晴らしいことですし、これらを残していくには職人さんの技術が必要です。様々な人が協力して残っている日本の伝統文化は見る人々を魅了し、和の精神を伝えてくれているんだなと思います。

そのなかで、私を魅了してやまないのは日本刀です。最近はよく日本刀ブームだと耳にするようになりました。知っている刀がテレビに映ることも多くなったような気がします。ですが、私は最初、刀の名と故事来歴を知っているだけで、その刀の奥深くにある「何か」に目を向けることはありませんでした。そんな私を変えたのは、とあるプロジェクトでした。

そのプロジェクトとは『阿蘇の宝刀、蛍丸を現代に甦らせる』というものです。蛍丸は戦後のＧＨＱによる銃砲等所持禁止令で接収されて以降、行方が分からなくなっている刀です。私は、このニュースで刀を打つ様子や焼き入れをしている様子を見て、言葉では表すことのできない感動を受けました。夜に刀を打っている場面の火の粉は、蛍が一斉に舞っているように私には見えました。しかし、プロジェクトの最中に熊本地震が発生します。阿蘇神社も大きな被害を受け、プロジェクトの進行も難しく思われました。ですが、復興をそして何より被災した人々を勇気づけたいと、プロジェクトは続行されました。画面越しに見た、蛍丸を見つめる、地域や様々な人の眼差しから、「蛍丸を愛しているんだ。」という思いが伝わってきました。そして、蛍丸が誰かの心に、大きな「ちから」を与えたのではないかと思いました。今まで私が目を向けてこなかった「何か」は、「刀を通して伝わってきた人々の思い」だったのだと思います。その刀を振るった人、後生に残すために尽力した人、たくさんの人が繋げた思いが、刀の奥深くにあったのです。

このことは刀に限っただけのことではありません。たくさんの伝統文化の中にも必ずあるものだと思います。

私は、伝統や職人文化を知っていくなかでたくさんの思いがあることを知りました。小さい頃に出会った日本刀の文化を中心に、私の視野は一気に広がりました。そして、生活を輝かせてくれる「ちから」があるということを強く感じました。現在、焼失したり、行方が分からなくなったりした刀を現代に甦らせるというプロジェクトがたくさんあります。私は、とてもいいプロジェクトだと思います。小学六年生の国語の教科書に、ドナルド・キーンさんの『かなえられた願い―日本人になること』というお話が載っていました。私はその中の、「この物語が自分のことのように分かるのは、紫式部がえがき出した心の世界が、現代を生きる私たち自身のものでもあるからです。」という一文が、すごく分かる気がしました。源氏物語はドナルド・キーンさんの心を魅了し、日本文学の美しさを伝えたいという、大きな「ちから」をくれました。そして、私も日本の伝統や職人文化の、美しさや繋がってきた思いを受け継ぎ、たくさんの人々に知ってもらいたいという、大きな「ちから」をもらいました。

今、伝統文化を受け継ぐ人は減ってきています。このままでは、先人の繋いだ思いが途切れてしまいます。そうならないようにするためにまずは、知ってもらうということが大切だと思います。私のように、伝統文化を知ったことで、今まで見える世界と違う新たな世界が見える人もいるかもしれないからです。

今まで、日本の文化がくれた「ちから」は、もしかすると、たくさんの大きな、「希望」なのかもしれません。その「希望」を途切れさせないようにするためにも、私は伝統文化を守り、伝える大人の一人になりたいです。